

4. 試行事業及び報告会

調査研究委員会での参考資料とするために、地域の健康生きがいつくりアドバイザー組織等から、高齢者の生きがい就労の機会創出につながる地域貢献型の事業を募集し、その中から先駆的で実施して効果が期待できるものを10事業選考し、試行事業として実施した。

4.1 試行事業実施団体一覧

	実施団体名	① 団体概要／② 実施した試行事業の概要
1	トクッキング株式会社 (北海道) http://www.tocooking.net/	① レシピ監修・制作、料理教室開催、子育て支援、就職支援を行っている。 ② 男性単独高齢者の多くが料理を苦手としている。そのため、レトルト食品、カップラーメンを主食とし、栄養バランスに欠けた生活を送っている。主として男性単独高齢者向けに、「食べる」が「楽しい」となるレシピを作成し、見守り活動のツールとする。
2	NPO法人くらしとお金の学校 (埼玉県) http://kurakane.org/	① 社会教育の推進、子どもの健全育成、経済活動の活性化を図るNPO。(2003年3月設立) ② 高齢者はそれぞれの立場で社会参加をすることで生きがい就労の場を作り出す。コミュニティカフェ。ミニデイサービス。
3	NPO法人シニア大楽 (東京都) http://www.senior-daigaku.jp/	① シニアライフアドバイザーが中心となり、高齢者の自助努力を支援するNPO。(2003年4月設立) ② 地域住民を対象にした市民講座を活性化することは、住民の健康生きがいつくりに貢献できる。これを促進するため、採用側の自治体担当者を招き、マッチング機会とする。
4	庄戸の元気づくり実行委員会 将来展望グループ (神奈川県)	① 横浜市栄区庄戸町の活性化のために集まった「地域の元気づくり会議」のメンバーが母体。(2001年9年発足) ② この家でこの街で長く住み続けたいをテーマとする「元気な街づくり講座」を開講。参加者が話し合いなどを通して、具体的な高齢者の生きがい就労の場や機会を創り出す。
5	長野県健康生きがいつくりアドバイザー協議会 http://www3.ocn.	① 長野県在住の健康生きがいつくりアドバイザーで構成される任意団体。(1993.12 設立) ② 高齢者に出番をもたらすITによるリーダーバンクの創設とネットワークの構築を目的。一芸を持つ高齢者のリーダーバンクの開設。リーダーバンクの運営とそ

	ne.jp/~ken-iki2/	の後のフォロー。
6	滋賀県健康生きがいつくり協議会 http://www.ikigai-shiga.com/	① 滋賀県在住の健康生きがいつくりアドバイザーで構成される任意団体。(1996年3月設立) ② 脳の健康教室として「くもん学習」を行うと共に、ノルディック・ウォーキングで脳の局所を活性化し認知症予防を目指し、認知症予防「よぼうむら」(くもん学習教室、ノルディック・ウォーキング)の実施。
7	兵庫県健康生きがいつくり協議会 http://kenkou-kyougikai.seesaa.net/	① 兵庫県在住の健康生きがいつくりアドバイザー等で構成される任意団体。(1995年11月設立) ② 生きがい就労として墓参代行の事業化。過疎地寺院の無縁墓地の現状調査、高齢化により遠隔郷里への墓参が困難になってきた都市居住者の調査。両者のニーズのマッチングポイントを生きがい就労の事業へと発展。
8	和歌山県健康生きがいつくりアドバイザー協議会	① 和歌山県在住の健康生きがいつくりアドバイザーで構成される任意団体。(1999年11月設立) ② 居場所づくりの輪を広げることで人とも関わりを深め、助け合いの関係を広げるために開催する。基調講演:「新しい公共とふれあいの居場所づくり」(厚労省荒川氏)、対談:堀内氏(和歌山大学副学長)。
9	岡山県健康生きがいつくりアドバイザー協議会	① 岡山県在住の健康生きがいつくりアドバイザーで構成される任意団体。(2000年4月設立) ② 講演会の開催。生きがい就労の創造、安全安心の居場所づくり、人材発掘。
10	NPO法人幼老共生まちづくり支援協会 (福岡県)	① 地域住民に対して、生涯教育に関する事業の支援を行う。地域の高齢者等を活用し、子どもたちとの交流を深める幼老共生のまちづくりを推進。(2010年11月設立) ② 高齢者等人材バンクの登録者に対し、生涯学習の支援者としての力量を高めるための実習や研修を実施し、研修修了後に近隣の市町村に派遣。

4.2 試行事業の実施報告

火と包丁を使わないで作る料理

トゥクッキング株式会社

1. 事業の目的

男性単独高齢者の多くが料理を苦手としている。そのため、レトルト食品、カップラーメンを主食とし、栄養バランスに欠けた生活を送っている。主として男性単独高齢者向けに、「食べる」が「楽しい」となるレシピを作成し、見守り活動のツールとすることを目的とする。

2. 実施した事業の概要

火を使わないで作る料理のレシピを24、ちょっとだけ火を使う料理のレシピを30、合計54種類のレシピを作成した。

①火を使わないレシピ

<缶詰・瓶詰>

- ・コーンごはん
- ・ザーサイごはん
- ・さばごはん
- ・さんまの蒲焼きごはん
- ・なめたけごはん
- ・ミックスビーンズサラダ
- ・牛肉の大和煮ごはん
- ・呉汁
- ・大豆ごはん
- ・赤貝ごはん

<お吸い物の素>

- ・お吸い物+うどん
- ・お吸い物+ほうれんそう
- ・お吸い物+焼きおにぎり

<キャベツ>

- ・キャベツと塩こんぶの和え物

<ほうれん草>

- ・ほうれん草と炒り卵のケチャップ和え

<牛肉の大和煮ごはん>



○材料

- お米・・・2合
- 牛肉の大和煮の缶詰・1缶
- 塩・・・少々



○作り方

米を洗って炊飯器に入れ、水加減をし、牛肉の大和煮の缶詰を汁ごと炊飯器に入れ、普通に炊く。

炊き上がったごはんは塩少々を加えさっくりと混ぜる。



<豆腐>

- ・納豆と炒り卵和え

<かまぼこ、ちくわ>

- ・ニラとニカマのドレッシング和え
- ・キャベツとカニカマのポン酢和え

<ささみ>

- ・ささみと長いものわさびしょうゆ和え
- ・ささみの酒蒸し
- ・ささみとチンゲン菜のオイスター炒め
- ・ささみと海藻ミックスにポン酢和え

<たまご>

- ・かんたん卵サンド
- ・レンジで卵焼き

<納豆と炒り卵和え>



- 材料
- 納豆・・1パック
 - 卵・・1個
 - 塩・・少々
 - ねぎ・・5cm位 (20g)



○作り方

- ①に塩一つまみ入れて炒り卵を作り、出来上がったらカップに納豆と添付のたれ、小口切りにしたねぎもに入れて混ぜ合わせる。
味が足りなければ、しょうゆを少々加える。



◆レンジで作る炒り卵：丈夫なカップに卵を割り入れ、さいばしで良く混ぜ合わせる。ラップなしで600Wのレンジなら1分程度加熱。レンジから取り出してよく混ぜる。レンジから取り出す時熱いので布巾などを使って持ちましょう。

① ちょっとだけ火を使うレシピ

<缶詰・瓶詰>

- ・キャベツとシーチキンの焼うどん
- ・ほうれん草となめたけの和え物
- ・大豆と切り干しの煮つけ
- ・大豆入りスープ
- ・大豆入りカレー

<お吸い物の素>

- ・お吸い物+もち

<キャベツ>

- ・キャベツと油揚げの煮物
- ・キャベツとあさりのさっぱり煮

<もやし>

- ・もやしとはんぺんの和え物
- ・もやしと炒り卵の和え物
- ・もやしとニラのごまよごし
- ・もやしと焼き鮭の和え物

<ほうれん草>

- ・ほうれん草とベーコンのソテー
- ・ほうれん草のごまよごし
- ・ほうれん草ともやしのナムル

<豆腐>

- ・肉豆腐
- ・焼き肉マーボ豆腐
- ・豆腐のキムチ炒め
- ・かんたん湯豆腐
- ・豆腐ステーキ

<納豆>

- ・こあげの焼き納豆

<かまぼこ、ちくわ>

- ・もやしとちくわのポン酢和え
- ・納豆とうどんキムチ和え

<たらこ>

- ・たらこうどん
- ・たらこピーマン

<たまご>

- ・ゆで卵
- ・卵とミックスベジタブルにソテー
- ・卵と豆腐のシンプル茶碗蒸し

<かんたん湯豆腐>



- 材料
絹ごし豆腐・・1丁 (200g)
タラの切り身・・2切れ
小松菜・・1/2把
昆布・・10cm くらい



- 作り方
鍋に水と昆布を入れて沸かし、
食べやすく切ったタラを加え、
豆腐も6等分にシザク切りに
した小松菜と共に入れ火を通
す。タラに火が通ったら、食
卓にのせポン酢でいただく。



- ◆1人分の湯豆腐を覚えると
色々なお魚などでお試しでき
ます。小さめの土鍋があると
より便利です。

3. 事後評価

本事業で作成したレシピは、関係団体、自治体等数カ所に対して、健康・生きがい開発財団を通じ、活用についての話をもちかけあり、内容等に対しては、ある程度の評価は得られている。

4. 今後の課題と展望

作成したレシピを活用してもらうために、このレシピを普及させていく必要がある。

今回の事業で作成した「カンタン! レシピ」は、3月から財団のホームページに掲載して、積極的にPRをしている。 ⇒ <http://www.ikigai-zaidan.or.jp/recipe.html>



生きがい就労ということも踏まえ、本事業の成果物をいかに活用するかが今後の課題であるが、活用についての提案先としては、以下のところが考えられる。

- ・ デイサービスを実施している介護施設（利用者に対する情報提供として）
- ・ 地域包括支援センター
- ・ 在宅高齢者に対するサービスを提供している居宅介護支援事業者、ケアマネジャー等

コミュニティカフェを中心とした生きがい就労事業

NPO法人くらしとお金の学校

1. 事業の目的

- ① わたしたちの街に住むもの同士がいつでもだれでもくつろげ、助け合いながら自分たちの手で住みやすい環境にしていく。その環境づくりの一つとしてコミュニティカフェを立ち上げ、関連した事業を拡大していく。
- ② 高齢者の豊かな経験と知恵をそれぞれの立場で生かすことで、活動の担い手であることが実感できる「生きがい就労」の場を創り出す。
- ③ それらを一歩進め、受託事業団体の特定非営利活動である「社会教育の推進を図る活動」と「地域経済活動の活性化を図る活動」として位置づけ、各世代を巻き込んだ事業の開発と生きがい就労の場の拡大を図る。

2. 事業の実施体制及びその他の関係団体との連携

【事業の実施体制】

運営主体：NPO暮らしとお金の学校が本事業に係る企画および地域への啓蒙活動を行う

実 施：みぬまで暮らす会（平成22年11月特定非営利法人認可）

責 任 者：健康生きがいくづくりアドバイザー 長谷川 幹夫（NPO暮らしとお金の学校正会員）

実施体制：事務局 村井英一（NPO暮らしとお金の学校事務局長）

事業実施に関する金銭管理

実 施 長沼和子（暮らしとお金の学校代表理事）

嘉成勝子（みぬまで暮らす会代表理事）

運営スタッフ8名（内、健康生きがいくづくりアドバイザー2名）

3. 実施した事業の概要

1) 実施日（試行事業の対象を含む継続的な実施）

① コミュニティカフェとワンコインランチ

1回目：平成22年10月20日（水）、21日（木）

2回目：平成23年1月19日（水）、20日（木）

2つの試行事業は現在、日常的に継続して実施している。

②シンポジウム「男たちの魅力ある第2のステージを考える」

平成23年1月29日（土）13:00～14:40

③ 地域人の見沼を学ぶ講座

平成23年2月26日（土）13:00～15:00

2) 事業場所

① コミュニティカフェおよびワンコインランチ

さいたま市見沼区大和田2-1288-4 みぬまハウス・大和田

② シンポジウム「魅力あるセカンドステージを創る」

さいたま市見沼区役所 多目的室

③ 「見沼を学ぶ」講座 於：みぬまハウス

3) 事業の対象と参加者数

見沼区およびさいたま市各区、近隣の市町村の概ね50歳以上
参加者

① コミュニティカフェ：第1回4名、2回目6名

② ワンコインランチ：第1回4名、2回目5名

③ シンポジウムおよび討論：28名

④ 見沼を学ぶ講座9名

4) 事業の内容

① コミュニティカフェ1回目10月20日（水）午後2時～3時（写真）

・希望により昆布茶に菓子付で提供した。参加費は無料。

試行事業としては日時を決めて行ったが、カフェ利用者が来たときにコーヒー等を提供していくことが本来の目的であり、それを継続して実施している。

・2回目は23年1月19日（水）に実施し、6名の参加があった。参加者から特に「コーヒーは飲みたいときに来たい」という要望は出なかった。



・コーヒー等には手づくりクッキーを付けた。

・運営スタッフは2名、1名が傾聴に携わった。

80分聴くことになったがありのままを聴きくことで相手は満足感を得たようだ。傾聴は今後の課題である。

・コミュニティカフェは今後も日常的に実施し、時には催し物を組み合わせて実施する。

② ワンコインランチ1回目10月21日（木）12時10分～午後1時

・クラブ活動（絵手紙）参加者6名のうち希望者5名に提供した。

・2回目は23年1月20日（木）に基本事業とするための検証として実施した。
参加者は5名。



- ・1回目は讃岐うどんと野菜てんぷら付、2回目は親子丼と煮豆
- ・費用は食材の実費として200円を徴収。
- ・調理時間は約40分で、2名のスタッフが担当した。
- ・コミュニティカフェと同様、クラブ活動に参加する人たちからの要望が増えた。（女性にはマージャンクラブが人気）

- ③ シンポジウム：平成23年1月29日（土）
 テーマ：「魅力あるセカンドステージを創る」
 基調講演「長寿社会からの発信」
 —21世紀高齢者の「生活モデル」を考える—
 講師：富永正文（元シンクタンク社長）



まとめ：地域の発見三つの視点

1. 地域から見ると景色が変わる
2. 新価値の創造「社会的報酬」
3. すべての人に「居場所」と「出番」



パネルディスカッション

「地域からの発信」

- ・40代代表：親父バンドリーダー
- ・50代代表：ファイナンシャルプランナー
- ・60代代表：見沼史研究家
- ・70代代表：講師（コーディネータ兼）

「地域人」とは何だ？

1. 生活の場でやりがいを見出せる人
2. 地域に居場所あり、仲間ありの人
3. 穏やかで心地よい個性の感じられる人
4. 専門的能力を地域に還流する人

—やりがい・生きがいと「地域」の接点を考える—

会場：さいたま市見沼区役所多目的室

参加人員28名（定員25名）

④ 見沼を学ぶ講座

見沼の歴史、地域を知り親しみをもつ。

1回目講座：2月26日（土）午後1時～3時、於：みぬまハウス

参加者：7名

4月2日（土）に見沼区に存在する史跡を回る。（出席予定者14名）

4. 事後評価

1. 実施した事業の評価・成果

1) 高齢者の生きがい就労の機会創出

コミュニティカフェとワンコインランチの拡大を目的に、事業としての是非について検証した。1回目の実施では、それぞれの作業手順と運営体制を計画化し、2回目でその検証を行い支障なく実施できることを確認した。そこでは2つの事業に関連した新たな取り組みが見えてきた、一つは「傾聴」すること、二つ目はコミュニティカフェで出す茶菓の手づくりである。さらには、新たな取り組みとなる高齢者・障がい者の生活支援を主体とした「市民後見人」の実際活動と、専門職のネットワークを活用した「よろず相談の窓口・ワンストップサービス」が可能となる。

高齢者の地域の居場所作りと生活支援という視点で実現していく。

① コミュニティカフェについて

【評価】 作業時間はドリップ時間と後片付けを入れて40分程度であった。その作業に1名、その間1名は参加者の話をひたすら聴く業務に従事した。傾聴スタッフはこの事業の中で今後大きな役割を持つ。

試行時の参加者が4名であったことからテーブルは1つで、スタッフも2名でよかった。最大人員14名（3卓）が参加できるので、その場合のスタッフは4名程度必要になるろう。

【成果】 お茶菓子に出した手作りクッキーを購入していく人、展示してある会員のハンドメイド品を購入する人も多く、その事業の広がりも期待できる。参加者の口コミによる訪問者が増加したことが大きな成果である。

② ワンコインランチについて

【評価】 調理時間は約1時間程度かかる。当日午後1時30分からの絵手紙クラブ参加者で希望する人に提供した。食材の手配から調理・配膳までを1名と、電話応対やみぬまハウス訪問者応対に1名の、2名で運営した。絵手紙クラブ参加者は6名でそのうち4名がランチを希望した。量的にも質的にも参加者から満足いく評価を得た。今後拡大していくことが予想され、相当程度の食材の調達と調理スタッフの養成が必要になる。

【効果】 参加者の「大勢でご飯食べるの楽しいね」のことばが印象的で、クラブ活動終了後はコミュニティカフェ参加を希望した人が3名いた。この相乗効果も期待できる。

2) 今後の事業拡大のため試行事業の発展

コミュニティカフェとワンコインランチは、それぞれ2回の試行事業を含めて日常的に実施した結果、23年2月末日までの延参加人員と日数は以下の通りであった。

事業内容	10月、11月	12月～23年2月
コミュニティカフェ	60名／7日	106名／49日

ワンコインランチ	26名／7日	134名／36日
延人員・日数	86名／14日	240名／85日

① 事業団体の活動への波及

- ・特定非営利活動の内容が、生涯学習の推進事業から少子高齢化社会事業に大きくシフトしていくと予測される。そこには新しい公共の理念が欠かせないのでその啓蒙活動の先駆的な活動を模索していきたい。
- ・シンポジウムの参加者はすでにそれぞれの地域で活動している方が多かったことから、地域のニーズと行政の仲立ちとしての役割が大きいことの認識で一致した。それを念頭に事業団体の活動分野を広げる。
- ・「誰でもいつでも」立ち寄ってください！と近くにある整形外科へ通院する患者への口コミと、近隣の自治会を通してのPRに努め、本試行事業の成果を活かす。

5. 今後の課題と展望

課題

- 1) みぬまハウスの開設時間は午前9時半から午後5時までだが、常駐するスタッフへの報酬は現在支払える状態ではない。就労の拡大や売上増の課金収入（売上の一定割合）が運営のポイントになる。
- 2) 健康生きがづくりアドバイザーの参加を広げること。
- 3) みぬまハウスは会員の手作業で改造したもので、初期投資は正会員からの借入金である。将来的には地元企業・商店に賛助会員としての負担を求めていきたい。いまの私たちの地域に溶け込む支援活動から、よい感触を受けている。
- 4) 「みぬまハウスは入りにくい、せまい」ということへの対応を検討中である。
 - ・自動ドアが壊れている（修理に40万円かかる）
 - ・入口が狭い、段差があるなど建物の構造上の問題を解決すること（改造には家主の承認がいる）
- 5) 一人で来られない人の移動手段がない、ボランティアでの車運転にも限界がある。将来的には福祉車両の所有も検討したい。
- 6) 来訪者の身元確認（事故の場合の連絡先）と危機管理を確立させる。

将来性・展望

- 1) 試行事業は10月の初回と、23年1月にその評価・検証として行った2回目の結果から、「共助の家」運営の柱としていける。着実にハウスへの来訪者が増えていることから設備を拡張していかなければならない。地域の商店会に加盟したので、将来的に商店や企業の賛助会員を増やし活動の基盤を固めて、組織を財団法人に移行する。
- 2) クラブ活動は参加者が生き生きとしており、楽しんでいる様子がうかがえる。絵手紙と麻雀が人気。コミュニティカフェとワンコインランチとの相乗効果が望める。そこで話すことや笑いに溶け込むことで「おしゃべりに来たヨ」「今日は話を聴いてくれ」といった、

個々の期待行動への展開につながっている。引きこもりがちの高齢者に「私も出来る」という気持ちを引きだしていくことが可能である。

- 3) 傾聴は高齢者の引きこもりやうつ状態に陥るのを防ぐ効果がある。そこで運営スタッフに聴いてもらった参加者が、今度は聴く側にたち「人の役に立つ」喜びを感じてもらうことで更なる発展につながる。
- 4) 地区の民生委員と協働で生活弱者（高齢者、障がいを持つ人など）の生活支援をする活動を展開している。この側面では「市民後見人」の活動機会の創出が期待できる。実際活動としてケアマネジャーの仲立ちを得て、2時間700円で訪問し「傾聴」を始めている。信頼関係醸成の第1歩とし、将来の支援活動につなげる。
- 5) どんな活動でも自分ができることを「みぬまハウス」で見つけ、「支えられる側」から、「支える側」へデビューする喜びが将来展望でみえる。

「自治体と講師を結ぶマッチング事業と

コミュニティづくりへの貢献」

NPO法人 シニア大楽

1. 事業の目的

地域住民(特にシニア)を対象にした市民講座を活性化することは住民の健康生きがいがいづくりに貢献できる。

本事業はこれを促進するための採用側の自治体担当者などを招き、マッチング機会とコミュニティづくりに貢献することを目的とする。

2. 事業の実施体制及びその他の関係団体等との連携

主催：NPO法人・シニア大楽 講師紹介センター

事務局長 藤井 敬三

事務局員 シニア大楽・本部会員10名が「事前作業」&「当日作業」を分担して担う。

3. 実施した事業の概要

1) 実施日

平成22年12月13日(月)

2) 事業場所

東京都中小企業復興公社3階 第一会議室(東京都千代田区神田佐久間町1-9)

3) 対象の事業

自治体及び市民団体の生涯学習企画担当者 101名参加

4) 事業の内容

生涯学習企画担当者のための

「成功する市民講座・企画立案と講師の選び方」講座研修

(1) 開催挨拶 NPO法人「シニア大楽」理事長 田中嘉文

(2) 講演「住民の学習講座のニーズと対応」

桜美林大学名誉教授 瀬沼克彰

(3) ショート講演 NPO「シニア大楽」人気講師 6名

①「老後を心配しすぎていませんか？」 ファイナンシャルプランナー 鷲山 俊男

②「脳ボケなんか吹っ飛ばせ」 医学博士 おおなぎ進

③ おいしく食べて、たのしく動こう 管理栄養士 玉田 富子

- ④「江戸五街道の不思議と謎」 日本テレビ文化センター講師 山下 敬之
- ⑤「海外旅行に出かける前に」 元日本航空(株)広報部長 福田 英夫
- ⑥「にっこりぽっくり、おしゃべり健康マジック」 「演多亭」芸人 斉藤 和文

(4) 講演「新感覚シニア・団塊世代の本音」

シニアライフアドバイザー 松本すみ子

(5) ショート講演 NPO「シニア大楽」人気講師 9名

- ⑦「踊る、認知症予防と転倒予防大作戦」 健康管理士 藤原 秋子
- ⑧「食を育む一和食で長寿」 前キッコーマン研究所長 水永 秀雄
- ⑨「高齢者のための記憶術」 円周率・世界記録保持者 原口 證
- ⑩「史実からみた忠臣蔵」 関東近世研究会会員 斉藤太嘉男
- ⑪「人を動かす言葉力」 カタリスト研究所代表 近藤 三城
- ⑫「五大陸オートバイ夢一人旅、走行中」 あきらめない旅人 松尾 清晴
- ⑬「身近な環境問題と対応策」 帝京大学教授 大石不二夫
- ⑭「笑って学ぶ、悪質業者から身を守る法」 悪質商法撃退士 ダボハゼのペペ
- ⑮「古典落語を一席」 (社)落語協会 真打 柳家小団治

(6) 講演 「成功する講師選びのポイント」

NPO「シニア大楽」講師紹介センター事務局長 藤井敬三



4. 事後評価

①参加者（自治体及び市民団体の生涯学習企画担当者）への効果

1) 自治体などの担当部門へ案内チラシ約800通を郵送し、約140名もの応募者があった。（会場の都合上、先着100名までとし、「お詫び状」を発送）

日常の活動において、彼ら担当者が市民講座の活性化に腐心していることの証左ともいえる。

2) 事後アンケート集計結果

参加者数 101名

回答者数 79名 (回答率 78.2%)

(質問・1)

本日の講座はいかがでしたか？

a. とても参考になった	55名	69.6%
b. まあまあ参考になった	21名	26.6%
c. あまり参考にならなかった	0名	
d. 無回答	3名	3.8%

(ご意見・感想)

- a. 大変参考になった。今後もこのような機会を継続してほしい。
- b. 魅力ある話はたった5分で充分わかる！！を実感しました。
- c. 「楽しい、得する、嬉しいがないと人は集まりません。」肝に銘じます。
- d. 内容ももちろんだが、タイトルが募集を左右することが理解できた。
- e. 講師の謝礼にいつも悩んでいる。予算の中で依頼できると助かる。
- f. 刺激を受けた。私自身も講師登録を目指して頑張りたい。

3) この研修の参加者が、地域住民（特にシニア）を対象にした市民講座に対し、意欲を以って取り組むことは、住民の健康生きがいつくりに貢献できる。このことは、地域におけるコミュニティづくりに貢献するものと確信する。

②講師派遣センター「登録講師」への効果

1) 現在、約500名の登録講師があり、その大多数が第一線を退いたシニアであり、第二の人生の活躍を目指して努力している。彼らに講師としての活躍の場を創るきっかけとなった。

2) 特に、今回「ショート講演・シニア大楽・人気講師」にノミネートされた15名は絶好のPRの機会と捉え、10分という短時間をフルに活用しての熱演であり、講師として一層の力量UPを実感させた。

3) 講師紹介センターへの依頼・照会の件数も徐々に増えており、彼らの活躍の場が広がっていくものと期待される。

③NPO法人「シニア大楽」の活動への効果

- 1) 今回の事業展開を通じ、首都圏の自治体窓口に対し、「シニア大楽」の存在と活動の一端を紹介することができた。地域コミュニティづくりの先頭に立つ彼らと共に、「少子高齢化社会」を活性化させたいという「シニア大楽」の設立趣旨に合致するものであり、今後に活かしたい。
- 2) この講座を通じ、シニア大楽の活動に興味と関心を持ち賛同するメンバーも増えており、一般市民向けの「公開講座」など、他の事業も活況を呈している。団塊の世代の本格リタイアの12年を迎え、シニアの活躍の受け皿として更なる拡大を目指したい。

④「生きがい就労」という観点からの効果

- 1) これまでも、これからも、団塊の世代を中心に大量のメンバーが第一線を退き、地域に回帰する。彼らが産業社会で培った知識や技量をどのように活かすかは社会全体の大きな課題と言える。
彼らの知識や技量を埋もれさすことなく、社会に還元する活動が大切であり、講師として活躍の機会を創ることが、その活用のひとつの手段と位置付ける。
- 2) 自らの知識や経験を「登録講師」として求められる聴衆の前で披露できることは、第一線を退いた彼らにとって、まさに新しい「生きがい就労」の機会である。
- 3) 今回の「ショート講演・シニア大楽・人気講師」にノミネートされた15名を始め「講師紹介センター」の登録講師は新しい「生きがい就労」の機会と捉え、自らの知識や経験を更に磨きながら、変わらぬ社会への貢献を目指している。
- 4) 一方、自治体など地域の住民に密着した活動を展開している担当者に課せられた課題は団塊の世代の退職に伴う地域回帰への受け皿作りであり、彼らの活性化に腐心している。自治体や市民活動団体の生涯学習企画担当者がその目的に合致した活動を展開するには幅広い情報やノウハウの取得が不可欠である。
- 5) 今回の事業への参加により、担当者としてより魅力的な目的に合致した「生涯学習活動の企画」に繋がるものと確信し、そのことが地域社会の活性化につながり、意欲ある中高齢者がその「生きがいと就労」を求める機運にもつながるものと思う。

5. 今後の課題と展望

- 1) 「シニアが相互に楽しく交流し学習できる場、また生きがいを見つけ活動が出来る機会づくり」を目的に設立した「シニア大楽」の基幹事業は「生涯学習教育事業(講師紹介センター)である。
この趣旨に賛同し、現在500名もの登録講師がある。
講師として「自分の経験や知識を活かし、後輩や地域のために役立ちたい」と努力している。そのこと自体がシニアの学習を通じての活性化に寄与しているのは事実である。しかし、本当の意味で「講師としての活躍の場づくり」は言うは易く行うは難い。
これからも、さまざまな機会を通じ、講師派遣のPR活動を行う必要がある。
- 2) 今回の事業展開が採用側の自治体担当者と登録講師を結ぶマッチング機会となるよう、大いに期待するところである。
- 3) 登録講師のスキル向上も課題である。「講師のための話し方講習会」も毎月実施しており、一定の成果を挙げている。最終的には本人の研鑽によるところが大きく、派遣・指名のリポートがある講師を目指し、努力をして欲しい。

生きがい就労による高齢化団地の活性化事業

庄戸の元気づくり実行委員会 将来展望グループ

1. 事業の目的

本事業は、「元気な街づくり講座：終の棲家に相応しい街づくり勉強会」と題してテーマを「この家、この街で長く住み続けたい」にして5日間の講座を開催した。

加齢による生活環境の変化に不安と不便を感じながら、住み慣れた土地で安心して暮らしたいという住民の思いを「街ぐるみで支え合う」「仕組み」を「地域の力」で実現するにはどのような方法があるか？何が必要かの「優先プランの策定」同時に、誰が始めるのかなど「人材の発掘」をも目指している。

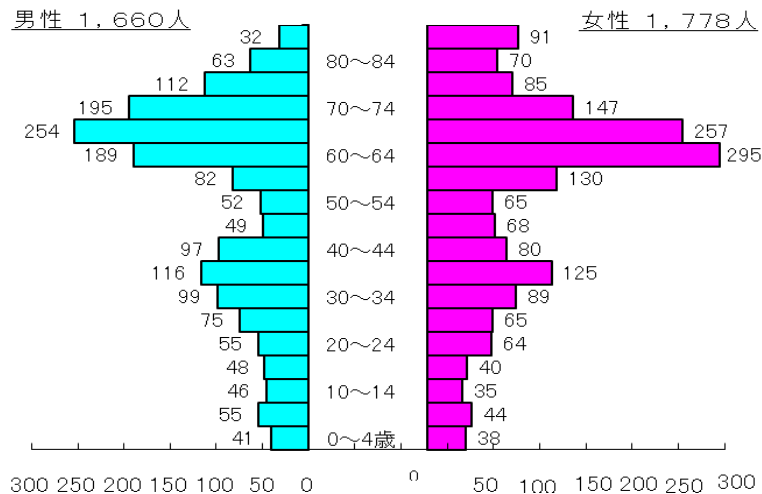
公募による参加者40名（庄戸の住民）が7人のゲスト講師を招き、他の地域の先進事例をヒントに ワイワイ談義で真剣に話、学びあった。また、街の活性化に結びつくボランティア活動「生きがい就労」のテーマも具体化、事業の調査・試行が始まった。

「庄戸の街」は、高齢化率は38% 急激な少子高齢化の進展で8年後はそれが54% 75歳以上が3人に1人の「超高齢地域社会」になる。

グラフで見る庄戸の少子高齢化の進展と人口減少の予測



庄戸の人口ピラミッド 総人口 3,448人



◎ 超高齢社会「庄戸の街」の8年後の、ビックリ予測！！。

- ・庄戸の街の人口は、現在の3450人から8年後は3000人（15%の減少）。
- ・街の人口の、65歳以上が1620人。（高齢化率は54%）
- ・そのうち、75歳以上が900人（住民の3人に1人である）
- ・介護保険の受給者数は500人以上（介護保険受給率予測は30%）

◎高齢住宅地「庄戸の街の諸問題」

- ・坂の多い街の暮らし（運転できなくなった時の不自由）
- ・買物（大型店舗の撤収）やバス路線（港南台駅まで）日常生活の不便
- ・高齢世帯の増加は在宅医療や在宅介護の支援サービス体制充足を期待している
- ・老老介護や高齢独り暮らしの増加・空家の増加・環境衛生と治安の不安がある
- ・向三軒両隣（お互い様）善隣友好の見守りネットワークが希薄
- ・建築協定の見直し「建ぺい率30%を40%に変更、2世帯住宅希望者の増加」
- ・建築協定の運用緩和「住宅地にミニ店舗・介護ケア拠点のニーズ増加」
- ・「医療・介護講座」「相続・遺言講座」「成年後見人制度」など身近な情報提供

◎終の棲家「庄戸の街の活性化」を準備する必要がある。

今回の講座では

- ・上記の危機感を前提に展開した広報活動や講座は街の課題を共有できる機会となった。
- ・地域ボランティア活動に対する理解を深め、活動に向けてのキッカケづくりとなった。
- ・参加者の平均年齢は70才、男性は65%、「老後の独居問題」に関心は高い
- ・また、団塊世代の参加は、地域の少子・高齢化の課題に取り組むエネルギーを感じた。
- ・一方、60代・70代の企業OBが多数暮らす「庄戸の街」の全体は、年金など経済面で比較的に恵まれている住民が多く「老後の選択肢」は多様で「課題の先送り」や現状の危機感は希薄になる傾向がある。
- ・8年後の庄戸は日本全国最先端の「少子・超高齢社会」の仲間入りをする。
- ・高齢住宅地の活性化の理念やプランは整理された。
- ・今後の活動の展開に期待する。

2. 事業の実施体制及びその他の関係団体との連携

- ・主 催 : 「庄戸の元気づくり実行委員会」
- ・事業受託者 : 「庄戸の将来展望」グループ 世話会 7名
(健康生きがいつくりアドバイザー3名)
- ・講座参加者 : 町内公募の参加者 人数40名 5日間 延べ参加人数160名
- ・協 賛 : 財団法人健康生きがい開発財団
: 神奈川健康生きがいつくりアドバイザー協議会
(新規事業プロジェクトチーム)
- ・後 援 : 横浜市栄区役所、栄区福祉協議会
庄戸の元気づくり委員会は平成19年9月、社会福祉ボランティアの活動をスタートした。
2年後に「住みよい街づくり」をテーマに「将来展望グループ」を立ち上げた。

3. 実施した事業の概要

1) 講座の実施

講座名：「元気なまちづくり講座」

テーマ：「この家で、この街で長く住み続けたい」

目的：本講座により、元気な高齢者が地域のニーズを理解、地域で事業を興し就労を通して、それぞれが健康で生きがいを持って、地域や社会に貢献できること

日時：9/25 10/24 11/14 11/28 12/12（日曜の午後3時間） 5日間

講座内容：少子高齢社会の地域課題を生活のインフラ強化を目的に、

住む、買物・交通、福祉施設、医療・介護、就労

（前期高齢者の地域就労）などの5項目に整理する。

1グループを（6～7人）編成で具体的に研究する。

グループのテーマで自由討論形式として「ワイワイ談義」とした。

講師：各分野でのゲスト専門講師7名を招聘した。

テーマ：①行政や自治会活動、地域活性化の先進事例。

②コミュニティ・ビジネスなど事業の手法研究。

③元気な前期高齢者の地域就労の機会創出など。

④住替えシステムの研究（コレクティブハウス、有料老人ホーム）

参加者：地域住民から参加者公募（1,400世帯個別配布）

9月26日	10月24日	11月14日	11月28日	12月12日
40人	30人	30人	30人	30人

2) 実施プログラム

日時	内容	ゲスト講師
9/16	「栄区の高齢化の状況と取組の考え方」	栄区：川合高齢支援課長
	グラフと数字で見る庄戸の少子高齢化の現状	将来展望 境 幹夫
	（加齢による暮らし変化と家族関係）	ワイワイ談義グループワーク
10/24	世界のコレクティブハウジングの事例	建築士 宮前 真理子
	高齢期のライフプラン&介護保険 有料老人ホームの基礎知識	群馬医療福祉大学・大学院教授 吉田隆幸
	（街の生活インフラとコミュニティ）	ワイワイ談義グループワーク
11/14	「栄区まちづくり中期計画」の取組を学ぶ	区役所 光田栄区長
	公田町団地 買物難民・見守りネット	公田町 大野自治会長
	湘南桂台自治会とNPOの事例報告	湘南桂台 中村涼子代表
	（コミュニティビジネスと住民ニーズ）	ワイワイ談義グループワーク

11/28	ボランティア活動と、持続可能な地域事業 地域雇用の創出・ボランティアと就労	NPOコミュニティビジネス 支援センター 宮本 諭
	(コミュニティ・ビジネスの法人化)	ワイワイ談義グループワーク
12/12	「新しい公共：これから始まる高齢社会の街づくり」	元川崎市区長 大下勝巳
	(コミュニティ事業の具体化と行程表の検討)	ワイワイ談義グループワーク

※ワイワイ談義では、加齢による戸惑いと同時に夫婦や子供達との関係の見直しなど俗人的な話題も本音で語られ、参加者の共感とコミュニティ（お互い様）の必要性を痛感した。今回の「ワイワイ談義」グループワーク 下記のテーマで4チームを編成できないだろう！無理だろう！の常識・先入観は捨て去って、ワイワイ話しながら具体策やプランを立ててみる・・・具体的・早期に・・・何か一つは実現したい。

1	買物	日常の買物など利便性を改善できないか。 大型店舗などと連携の方法はないのだろうか？
2	交通	停留所の増加と生活路線（外出・通院）を増やす方法はないか。 コミュニティ・バスは不可能なのでしょうか？
3	活動拠点の誘致	庄戸に公共福祉施設を誘致・実現する方法はないか？ 地域包括支援センターやコミュニティ広場など
4	介護施設など誘致	要介護になっても住み続けられる街づくり。 介護福祉施設（特養）などを庄戸に誘致する方法は？
5	不動産の活用	2世代住宅など、高齢者が住みやすくなる街づくり。 風致地区の規制緩和や建築協定の見直しは可能か？ 隣近所に小さなパン屋、ケーキ屋さんはいらないか？
6	ボランティアと就労	元気な高齢者が働くことを大切にしたい街づくり 安心安価なボランティアの組織化、お助け隊NPOなど

- ・地域のつながりや、住民同士の親近感も希薄化、地域住民のニーズや課題は多様化している。
- ・住民は加齢による生活環境の変化に気づき、日常生活の中で不便さと不安を抱いている。
- ・家族や隣近所など地域全体で「支え合う仕組み」を「地域の力」で築くことが大切だと考え始めている。
- ・同時に15%の人が便利な街や家、子供達との同居などの転居も考えているようだ。

講座風景

ゲスト講師 横浜市栄区光田区長



ワイワイ談義の様様

4. 事後評価

1) 講座参加者のアンケート調査 (回収率90% 35名が回答)

- ・講座に参加して良かった 95%
- ・みんなが話すワイワイ談義は良かった 90%
- ・ゲスト講師7名の内容が良かった 92%

講座の構築と運営で配慮した事項は

- ・地域の高齢者の健康と生きがいづくり。
- ・地域の課題解決のための活動への参加の機会づくり。
- ・地域の情報の共有、思考・知識の拡大。
- ・豊かな経験・技能の発揮による満足感・達成感の醸成。
- ・ワイワイ談義を通しての仲間づくり、コミュニティの構築 など。

講座評価は、延べ160名の参加者の実績であり期待した以上の成果であった。

2) 高齢者70世帯を対象に住民アンケート調査 (回答率85%)

- ・今後も庄戸に住み続けたい人 85%
 - ・高齢者の住める環境に転居を考えている 15%
 - ・庄戸で住み続けるために不安がある 90%
- (・独居・買物や交通が不便・医療や介護相談施設の不足)
- ・介護を受ける時は、施設よりも自分の家で受けたい 40%
- (・有料老人ホームに住替える20% 特養施設など25%)

※講評すると

- ・今後も住み続ける希望者が多く、健康・医療・介護への関心が高い
- ・元気な高齢者は、介護や病気についての「問題を先延ばし」する人が多く。
- ・自分が元気ゆえに、「庄戸の超高齢化」の課題にまだ真剣に向き合っていない。

3) 今後の発展及び波及の見通し

- ・講座受講者や毎月発行の機関誌「元気づくりニュース」の広報活動は庄戸の急激な少子・高齢化の情報を数値やグラフで提示した事が町の話題になり、共有された。
- ・8年後人口の3人に1人が75歳以上 介護保険受給者の予測 500人は深刻な課題。
- ・超高齢者の街を「終の棲家」としてどのように暮らしていくか真剣に話し合われた
- ・「老老介護」「独居老人」「買物難民」「限界集落」「無縁社会」など諸問題を地域や行政がどのように支え合い解決していくか、元気な高齢者の役割も具体的に整理された。
- ・「お互い様」ボランティア活動の自発性・公益性・無償性・連帯性の理解が深まった。
- ・活動を行う上での開発性・倫理的価値志向性・自立性・継続性の大切さを学んだ。
- ・活動の継続性と発展のためのNPOなど、有給のスタッフ活動に興味・関心が動いた。

5. 今後の課題と展望

講座で理念の構築はできた・・これからが実践の始まりと捉えている

ボランティア活動の「生きがい就労」で高齢住宅地の活性化は現可能か？

①すでに具体的に準備・試行を始めたテーマはある。

- ・ガレージ販売：地産の野菜販売（空き地利用の野菜作り）
：パンの販売（パン作り名人の主婦を公募、サロンで試行販売）
- ・送迎サービス：介護保険以外の外出送迎・付添サービス・タクシー会社と対話
- ・くらし応援隊：高齢者世帯の庭の草取り等生活支援事業をNPOなど法人化の研究
- ・空家の活用：空地・空家の管理を受託して、町内たまり場づくりなどの計画

② 町内自治会組織の活性化と、行政・福祉専門機関と連携の動き

- ・少子・高齢地域の自治会は住民ニーズ掌握、優先する活動重点項目を検討する。
- ・「町内自治会活動や役員」に住民が積極的に参加する。
- ・「シニアクラブ」は友愛活動を今後の重点活動と宣言している。
- ・「住みよい街づくり」のボランティア・コミュニティ事業を町内に提案をする。
- ・区役所や区福祉協議会と連携、協働事業の推進によって（新しい公共）を築く。

真剣なワイワイ談義



高齢者の生きがい就労の機会創出に関する I T 化実験

長野県健康生きがいづくりアドバイザー協議会

1. 事業の目的

高齢者に出番をもたらす I T 化によるリーダーバンクの創設とネットワークの構築。

2. 事業の実施体制及びその他の関係団体等との連携

長野県健康生きがいづくりアドバイザー協議会

(事業実行委員会: 小山功実行委員長他 13 名)

財団法人長野県長寿社会開発センター

長野県ボランティア交流センター

NPO 法人マザーポート

学校法人平青学園

3. 実施した事業の概要

リーダーバンクシステム構築とツール(パンフレット)制作ならびにパソコン講座の開催

1) 実施日

① 2/24 リーダーバンクシステム完成

担当 柳沢 明子 (生きがい情報士講師)

長野県健康生きがいづくりアドバイザー協議会のホームページ上にリーダーバンクコーナーを開設。

② 2/25 パンフレット“生きがい”5000部完成。

制作担当 浅井 博

公設機関等の施設内情報スタンドにパンフレットを配置(担当割)。

③ 2/26 シニアパソコン講座の開催

講師 柳沢 明子

2) 事業場所

パソコン講座(集客事業): 長野市アークス 1-31 学校法人平青学園 2F 教室

3) 事業の対象(参加者数)

シニアリーダー(11名)

4) 事業の内容

① リーダーバンクシステムの構築

リーダーバンクシステムを構築し、長野県健康生きがいつくりアドバイザー協議会のホームページ上にそのリーダーバンクのコーナーを開設する。



長野県健康生きがいつくりアドバイザー協議会

[new](#) [リーダーバンク](#) | [協議会の目的](#) | [事業内容](#) | [健康生きがいつくりアドバイザーの活動](#) | [協議会会則](#) | [トピックス](#) |



長野県健康生きがいつくりアドバイザー協議会は
超高齢社会における
中高年齢者の健康と生きがいつくりを支援する
様々な事業の展開を通して、
中高年齢者の健康生きがいつくりの増進と自立を助長し、
より豊かで活力ある地域社会づくりに寄与しています

Topics

- 🚩 [講師派遣事業開始](#)
リーダーバンクのページ開設しました。ご利用ください。
- 🚩 [第9回 健康生きがいつくりアドバイザー養成講座 受講者募集](#)
超高齢社会を迎え、今、最も求められている資格
活躍の舞台が広がります。

■平成22年度 会員相互研修会報告

リーダーバンクについて

登録者一覧 50音順

- ①健康関連
- ②ライフプラン関連
- ③家庭経済関連
- ④医療関連
- ⑤福祉介護関連
- ⑥地域、ボランティア関連
- ⑦家族問題
- ⑧余暇趣味、仲間、学習
- ⑨労務、雇用、起業
- ⑩カウンセリング
- ⑪研修、その他

●リーダーバンクについて

長野県健康生きがいつくりアドバイザー協議会では、近づく超高齢社会を健康で、かつ明るく生きがいをもって暮らせるお手伝いをさせていただくため、現在長野県の各地で活躍しているリーダーやアドバイザーをホームページに登録いたしました。
様々な分野の第一線で活動するリーダーの方々の方は必ず皆様のご期待に応えられると思います。

●講師派遣依頼について

下記の項目をご確認の上、お電話またはE-メールにてご連絡ください。

- 1 主催者（代表者）
 - 2 開催日時・場所
 - 3 テーマ・ご依頼の内容
 - 4 参加予定者とおよその人数
 - 5 講師料・交通費
- ※その他、ご要望に添ってご相談させていただきます。

●講師派遣依頼について

- ・講師派遣のご依頼
 - 基調講演 50,000円/1コマ
 - 通常講演 10,000円/1コマ
 - ・講演以外の活動のご依頼
 - 基準料金 5,000円/1コマ
- ※研修プラン、イベント企画などのご相談も承ります。
※詳細についてはお気軽にお問い合わせください。

②シニアパソコン講座の開催（2月26日）

<プログラム>

開講挨拶:小山 功実行委員長

講義:「情報発信と検索」

講師:柳沢 明子(生きがい情報士講師、健康生きがいづくりアドバイザー)

- i 自己紹介(パソコンとの関わりは?)
- ii リーダーバンクサイトの紹介
- iii インターネットでできること
- iv 情報技術とアドバイザーとしての目標
- v 検索練習タイム

☆効率的な検索方法

☆生きがい情報士検索システム

- vi トrendキーワード

☆ブログ、ツイッター、Facebookなど

閉講挨拶:樽田 國臣副実行委員長

講座終了後、近くのファミレスに会場を移し交流会を実施。

③協議会の本部体制の確立

事務局との業務区分を図った。

4. 事後評価

健康・生きがい開発財団の生きがいWEB、生きがい情報検索支援システムから長野県健康生きがいづくりアドバイザー協議会のリーダーバンク登録者の情報が検索できる。

このシステムを活用することで、意欲ある高齢者が事業等において採用される機会などに邂逅することが見込まれる。

特に今回発掘され、バンク登録となった講師陣は、アドバイザーに加えて一般登録者が10名で、様々な分野で活躍中の方々であり、今後の展開には波及効果を含め、興味を持てる。

<具体例>

社会貢献世代と目される65歳から74歳、あるいは生涯現役を目途する元気高齢者対象のボランティア活動予備軍への生きがい就労となる。

- ・落語の公演：1回目落語の実演、2回目芸名を付け、3回目小唄を身に付けて送り出す。
(当人はすし店経営のかたわらボランティアで県内落語公演1500回達成)
- ・真向法体操で足腰を鍛え、90歳まで踊れることを指導中のダンス教師(健康社交ダンス：スニーカーでダンスができる)とダンスの新分野を開発。
新規指導者の増は当人たちにとり生きがい就労の機会創出となる。
- ・高齢農家80軒をまとめあげ、栽培し収穫したサツマイモを地場酒造会社に持ち込み芋焼酎5000本を製品化して出荷。自家用を含め完売を果たした元住宅会社支店長のサラリーマンOBの地域活性化実現の講演と実践指導。
- ・地域資源である神社仏閣の社殿・本堂を住民に解放することでミニカルチャーセンターの開設。地域文化振興を図るとの僧職者。
- ・ネーミングの良さを生かして、JR東日本の三才駅と住民手作りの地区の宮処西三才神社とを結び付け、「縁起」を売り物にホームページなどで集客。七五三の三歳児と三才駅で記念写真を撮り西三才神社に参拝する連携型の家族記念旅行の提案が定着化、これをモデル事例としてのコーチングの指導。
- ・介護保険といわず、国民健康保険証の不使用で一年間過ごせたことを成果として、仲間を増やし、公民館、高齢者福祉センター、地域包括支援センターなどで活動する指導者づくりで、生きがい就労のメンバー拡大に努める体力づくりグループの実践者。

5. 今後の課題と展望

第一次リーダーバンク登録者40名。これを第二次、第三次で当面100名までバンク登録者を拡充する。

状況を見て将来的にはさらに大きく登録者増を図っていく計画である。

課題はインターネット利用者が近年大幅増となっているとはいうものの、高齢者層になるに従い漸減し、特に65歳以上ともなるとネット利用が激減との調査数値がある。

これを睨んで高齢者の生きがい就労の機会創出を図る本事業としては、ネット検索のシステム構築とともに紙媒体のパンフレット制作は絶対に欠かすことはできないとの思いから同時並行でパンフレット作りを行ってきた。

出来上がったパンフレットを、長野県庁をはじめとして県下の各市町村役場等の施設内情報スタンドに置く。パンフレットの訴求力が生きこれを手にする県民の利活用で成果があがることが期待される。また、各種講座等にパンフ持込みでPRに努める。

高齢者の生きがい就労の機会創出に関する調査研究事業

滋賀県健康生きがいづくり協議会

1. 事業の目的

高齢者の「認知症予防」の為、「脳健康教室」と「ノルディックウォーキング」を組み合わせ、いつまでも元気な高齢者づくりに協力をすると同時に、それらを指導・応援をする為のサポーターとして「高齢者の生きがい就労」にも結びつく事業として開催をする物です。一人暮らしや高齢者夫婦だけの世帯が急激に増加する中で、できるだけ認知症にならないようにすることが必要であり、70歳を超えると「私は認知症にならないだろうか?」「認知症になったらどうしよう?」と言う切実な不安を取り除く方法として、又 サポーターの方は、新しいことを体験し「もう一肌脱ぐ」ことで新しい世界を見つけ出し、そこに少しでも収入があることで元気を得ることができるという両面の働きがあることを試行事業として行います。

2. 事業の実施体制及びその他の関係団体等との連携

健生の皆さんが、サポーターとしての訓練を受け、同時に地域で毎週一日は教室に出てきて、その週にあった色々な出来事を会話することで予防となることを健生とその近くの皆さんは準会員として同様のサポーター研修を受けていただきました。

健生本部と健生サポーター、そして準会員サポーターと言う新しい組織づくりが出来上がり、その中から23年度「滋賀県の養成講座」に参加していただくというプラスアルファまで付くことができました。

他県の皆様もご賛同を得て、現在検討中の健生もあるということをお聞きいたしております。

3. 実施した事業の概要

1) 実施日

大津会場

平成22年10月23日 サポーター研修(就労者)

平成23年 2月 1日 学習者研修開始

(1回から12回/月4回 3ヶ月)

長浜会場

平成22年11月16日 サポーター研修(就労者)

平成23年 1月11日 学習者研修開始

(1回から12回/月4回 3ヶ月)

高島会場

平成22年 9月28日 高島市提案説明会

平成22年10月 8日 プレゼンテーション実施（不承認）

2) 事業場所

草津レイカディア教室

長浜市 六荘公民館

3) 事業の対象

大津会場 サポーター研修 30人 (10/23)

学習者研修参加者数 8名で開始、サポーター（就労者） 8名

長浜会場 サポーター研修 20人 (11/16)

学習者研修参加者 11名で開始 サポーター（就労者） 6名

4) 事業の内容

各会場において

1. 脳健康教室実習 確認 大津会場 2月1日

長浜会場 1月11日

2. 学習者研修 開始

読み・書き

計算・すうじ盤

ノルディックウォーキング 実施



大津研修会

1、実施内容

- ・ 一週間に一度「教室に来てもらい」学習をする。
- ・ 他の6日間は、自宅で学習をして、学習日に宿題を持参する。
- ・ テキストは3ヶ月分あり、1週間分ずつ渡し、毎日欠かさず学ぶ。
- ・ サポーターには、滋賀健生で作成をした“指導要綱”により漏れのない学習を実施。
- ・ ノルディックウォーキングは、冬場でもあり廊下で実施をする。早速、個人で買い求めたい意向の方もあり、好評を得る。
- ・ 現在 実施途中であり、結果が見えるまでには行っていない状況である。



大津市若葉町会場



長浜研修会場

2、結果

- ・ 成果は、3ヶ月の学習終了時に、今後も続けて行うか否か
- ・ 新しい学習者を増やす方法を検討中である。

4. 事後評価

1) 高齢者の生きがい就労の機会創出の実現

高齢者の就労について、今の自分が持っている技能だけではなく、新しく技術を持つことで、就労への意欲が見えてきた。就労に関しては「もう一肌脱ぐ」と言う気持ちになることがいかに大切であるかが実感でき、新しい事への意欲創出にもつながることが実証できつつある。

- ① 今、日本に求められていることは「高齢化による社会全体の急激な変化」が本質的な課題である。国民の立場や分野を超えた連携とビジョンで「幸せな超高齢社会」を築くことを国民全体で共有することである。
- ② 高齢者の住まい方については、2010年から2030年になると世帯主が75歳以上の単独世帯又は夫婦世帯が292万世帯に増加します。この人達の住まれる建物を造ることはできません。従って、地域で見るという考え方を必要になります。その為には、元気な高齢者となってもらふ事への協力が求められる様になり、高齢者の生きがい就労と合わせ効果が両面が出るということが分かりました。
- ③ 「一人ひとりが幸せで豊かな社会にするため社会構造を変える」事に「前向きの危機感」を持って行ふ。社会構造を変えるとは、社会のパラダイムを転換する必要があり、高齢者も現役世代、若年層もみんなが「もう一肌脱ぐ」ということが必要となってきます。「現在の自分の置かれている状況で何が出来るのか」を考えて、方向性を求めることがこれから求められることであり「もう一肌脱ぐ」という気持ち～学生を育て、退職前の人をもう一度再教育し、高齢者にも出来ることを育てるチャンスでもあることが発見されました。
- ④ 収入を得ることへの意欲は、年齢に関係なく、更なる「生きがい」を作り出す為の原点であることの発見が滋賀県内の多くの地域から集まったサポーター（就労者）に見られ、湖南市からこられた一人だけの参加者は“自分の為でもあり、高齢者のためにもなる”と意気込んでおられました。

2) 頭だけではなく、身体活動の大切さ

今回は、「脳健康教室」とノルディックウォーキングを同時開催といたしましたことへの反響が大きく、「このポールがほしいのですが、いくらするのですか？」との声がサポーターにもあり、自分の就労と同時に「自分の健康」を確かめながら就労をするという「高齢者の生きがい就労の機会創出」の問題点が見えた部分があり、いつまでも年齢に関係なく就労することで「再度自分を見直す」ことができる機会であることが分かりました。

5. 今後の課題と展望

高齢者の生きがい就労は、新しい自分を見つけ出し、自分は定年退職をしたからとか、65歳になったからとか、70歳になったからといって自分を甘やかすのではなく、何歳からでも、幾つになっても「もう一肌脱ぐ」と言う気持ちが周りを元気付け、自分も「まだまだやれる」という気持ちを持つことが今の時代には大切なことで、アドバイザーは年齢には関係なく常に新しいことへの挑戦と、できれば周りの皆さんに、今の時代に「何を求められているのかを考える」事が大切であり、87歳の学習者から「明日の為に、ボケないために、私はこれを習い、よい運動をすることができてありがたいです」との言葉を聞いて、今回の事業から「今の時代に求められている」、みんなが「もう一肌脱ぐ」ことで社会を活性化させる材料提供になったら、本試行事業の大きな目的の一つを得ることができたのではないかと考えます。

遠隔地墓参の現状と墓参代行に関する試行事業

兵庫県健康生きがいつくり協議会

1. 事業の目的

「生きがい就労」として墓参代行の事業化を目的とする。無縁墓地の増加に悩む過疎地寺院と、高齢化して遠隔地墓地が困難になってきた高齢都市居住者の悩みを同時に解決する方策、即ち両者のニーズマッチングポイントを事業化することをねらいとする。そのために、現地調査、大学研究機関の文献調査、取り巻く環境の動向、試行を実施し、試行を通じて事業化の狙いどころの決定を行う。

2. 事業の実施体制及びその他の関係団体等との連携

兵庫県健康生きがいつくりアドバイザーの中で、このテーマに関心のある者を公募した結果、3名を選定し委員として事業の実施にあたった。本件テーマを事業化に結びつける専門家、或いは研究者を探すことは極めて困難であると判断し、委員自体を研究者として調査に当たり且つ事業推進のスタッフとして1人3役を担当しすべての作業を完結させた。

3. 実施した事業の概要

1) 実施日

平成22年10月19日 27日28日 29日 30日

11月4日 12月23日

平成23年1月11日 27日

2) 実施場所

兵庫県丹波市 愛媛県宇和島市 島根県太田市 静岡県富士宮市

3) 事業の対象

16墓園

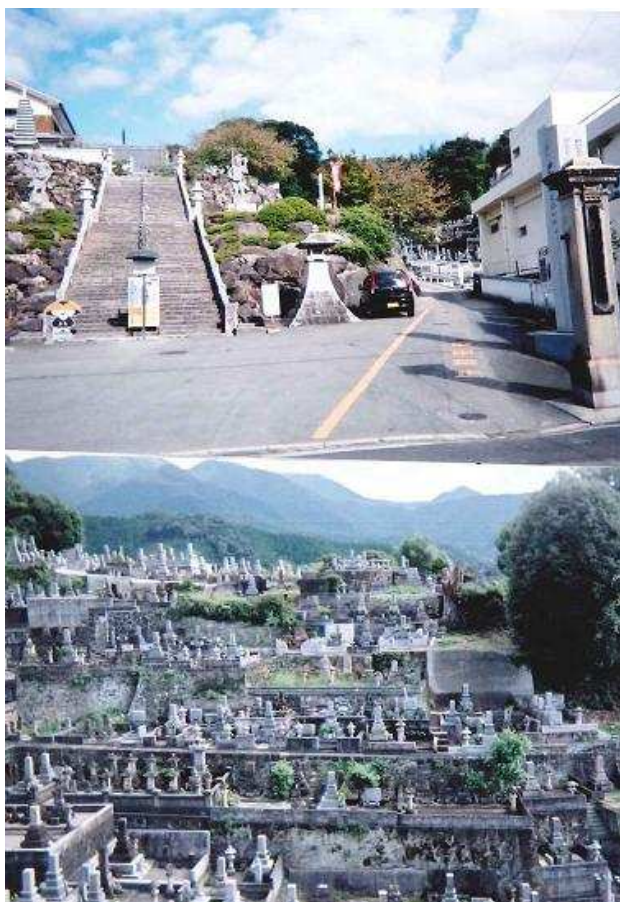
4) 事業の内容

実施事業は調査事業と試行事業が主たるものであるがその両事業へのとりくみと同時に、とりまく環境の動向についての研究をもすすめ、その結果をふまえて生きがい就労への事業化のための狙いどころ、方向付けを行った。調査事業と試行事業の実施内容は次のとおりである。※試行事業の詳細

1. 調査事業

(1) 遠隔地墓地の調査は愛媛県宇和島市の6寺を平成22年10月27日28日実施。

島根県太田市寺院を平成22年10月29日30日に実施



(2) 都市近郊墓地の調査として明石市宮石々谷墓園を平成22年12月23日に実施。

(3) 宗派別永代供養内容と改葬について、浄土宗系、浄土真宗系(本願寺派、大谷派)、真言宗系、日蓮宗系、禅宗系の本山、末寺の調査を実施。

2. 試行事業

(1) 兵庫県丹波市墓園へN家の代行墓参



(2) 静岡県富士宮市墓園へI家とI家への2家の代行墓参



(3) 愛媛県宇和島市寺院でのD家の13回忌法要参加



(4) 静岡県富士宮市墓園の改葬・廃墓事例の立ち合い

4. 事後評価

前項で調査事業内容と試行事業内容について述べたが、この項では、その両事業と併行した研究による日本人(仏教徒)の死生観の変化と墓参意識の動向を考え、墓参代事業をとりまく環境について述べる。そのうえで生きがい就労の機会創出の事業化の見通しを考える。

1) 自然葬への関心の高まり

自然葬とは死者の遺骨を自然に返すという葬法である。江戸時代の檀家制度に始まった伝統的葬儀である墓地葬は、死者を浄土や天国に送るといふ葬送である。しかし、高度成長期の頃から高いや霊魂の観念が希薄になり、死者と別れる葬儀即ち告別が変わった。更に寺や僧侶を除く家族葬、友人葬、散骨、樹木葬など多様な葬法が広まってきている。そして直葬という葬儀をしないで火葬するという葬法さえ行われるようになった。

2) しかし上述の風潮はまだ例外的なものであることは、大学研究機関、マスコミの市場調査で証明されている。お寺嫌いのお墓好きというのが日本人の特徴とされている。

墓参回数も意外な程大都市の人程頻度が高く、平均して6回というのが龍谷大学の調査結果である。先祖を敬う、故人をしのぶ、墓参による気持ちの安らぎ等仏教徒日本人の潜在的信心ごころは根強いものであると言える。葬法の変化は否めないが、少なくとも今世紀中はお墓がある限り墓参代行には大きな変化は直ちにおこらないと考えられる。

このことを踏まえ次項で今後の課題として事業化の狙いどころに言及する。

5. 今後の課題と展望

これまでの調査、試行、とりまく環境検証から今後の課題を3点に絞った。

- 1) 衰退した巨大教団の基地使用者へのアプローチが顧客獲得に最も効果が期待できる。極めて少ないサンプルアプローチであるが十分に実証できた。
- 2) 末寺々院に対する永代供養商法のすすめが寺院には最も関心が高いことが判明した。
- 3) 仏事に対する知識の少ない人に対するコンサルティング業務は、墓参代行の事業には欠かすことの出来ないものである。

以上が生きがい就労のための墓参代行の狙いどころである。

みんなの居場所研究フォーラム in 和歌山

和歌山県健康生きがいつくりアドバイザー協議会

1. 事業の目的

暮らしの中で、地域との繋がりを持つこと、楽しく集えるサロンや、安心して交われる居場所、憩いの場があることが、高齢者等の心の安らぎと喜びとなり、地域との絆が安全・安心な地域づくりにつながる。このような居場所づくりの輪が、地域の人たちの取組みによって広がりつつある。更にこの輪を広げることで、高齢者等が人との関わりを深め、いろいろな助け合いの関係が生まれる。

このような共助を高齢者の生きがい就労としての機会創出につなげるための調査研究についての試行事業を行うことを目的とする。

① 地域の支えあい井戸端会議

- ・地域で行われている地域の支えあい事例紹介
- ・地域での問題点を考えこれからの支え合いの方向性を探る

② みんなの居場所研究フォーラム

- ・新しい公共とふれあいの居場所づくり
- ・和歌山における居場所づくりとは？
- ・事例に学ぶみんなの居場所
- ・グループディスカッション

2. 事業の実施体制及びその他の関係団体等との連携

主催：和歌山県健康生きがいつくりアドバイザー協議会

NPO 法人 WAC わかやま

紀州わかやま勤マルネット推進協議会

地域支え愛ネットワーク

共催：財団法人 健康・生きがい開発財団

さわやか和歌山

NPO 法人わかやま NPO センター

後援：和歌山県、和歌山市、和歌山県初回福祉協議会、さわやか近畿ブロック

NPO 法人和歌山保健科学センター

社会福祉コミュニティー 花園こむぎの郷

えがおネット

3. 実施した事業の概要

1) 実施日

平成22年10月30日(土)

平成22年11月6日(土)

2) 事業場所

- ・ 和歌山市中央コミュニティセンター 多目的ホール
- ・ 和歌山県県民交流プラザ和歌山ビック愛 5階501～503号会議室

3) 事業の対象(参加者数も記入する)

- ① 地域支えあい井戸端会議 参加者 38名
- ② みんなの居場所研究フォーラム in 和歌山者 参加者115名

【参加者職種】

和歌山県・市・長寿社会・福祉関係・保健所等の職員

自立支援・障がい者事業所

介護保険・高齢者事業所

スポーツクラブ事業所

医療関係者

県社会福祉協議会長寿社会センター職員

児童・支援学校関係職員

シニアリーダー

主催者、共催者、後援者のメンバー 等など

4) 事業の内容

① 地域支えあい井戸端会議

この井戸端会議は「地域の支えあい」について、出席者と一緒にこれからの地域の支え合いをどのように考えればいいかを話し合う

- ・ 各地で行われている地域の支えあいの事例紹介
- ・ 地域での問題点を考えこれからの支え合いの方向性を探る



② みんなの居場所研究フォーラム in 和歌山

超少子高齢社会を迎えようとする地域の中で、高齢者の方をはじめとした地域のみなさんが「つながる」「つどう」ことができる居場所づくりの取り組みが全国に広がっています。地域の「絆」を安全・安心な地域づくりにも活かすことができる「みんなの居場所」のあり方について考えます。

- ・ 基調講演「新しい公共とふれあいの居場所づくり」
- ・ 対談「和歌山における居場所づくりとは？」
- ・ パネルディスカッション「事例に学ぶみんなの居場所」
- ・ グループディスカッション&まとめ



「みんなの居場所」と「生きがい就労」の機会創出について

地域に住む多世代の人々が自由に参加でき、主体的に関わることにより、自分を生かしながらすごせる場所、そこでふれあいが、地域の助け合うきっかけにつながる場所です。年齢問わず、身体的なケアだけではなく心のケアにもつながり、高齢者も安心できる居場所となります。この居場所づくりをする中で、高齢者の生きがい就労としての機会創出につなげていくことが可能で、この調査研究のための事例事業です。

4. 事後評価

【評価】

「地域ふれあい井戸端会議」 & 「みんなの居場所フォーラム」

(1) 基本ベースの地域活動に際して使用する用語認識から優しく論議が始まった

「市民」「市民活動」「協働」「推進」「支援」何気ない表現だが奥が深い

(2) 事例紹介として

「あったかホーム老いも若きも語ろう（滋賀県大津市）」

「すずの会の取組み（川崎市）」

「居場所もうひとつの家（静岡県袋井市）」

「エフ・エーさろん（大阪市）」

「居場所みんなの家（和歌山市）」

さみしいから、コンビニに買い物に行くおばあさんがいる。

お店のおねえさんの「はい、おつり」というひと言が、その日のおばあさんが交わす、唯一の言葉なのだという。学校と塾と自宅を巡る日々で人と遊ぶ場所を持たない子どもたち。子育ての責任をひとり背負い込み、途方に暮れながら、たずねる相手もいない、母親たち。地域とのつながりをまったく持たないサラリーマン。さまざまな人が、起こす社会問題を突き止めていくと「ちょっと悩みを打ち明けられる人がいたら」「どうしてあの人が抱えている問題に誰も気付かなかったのだろう」「誰かがほんの少し手伝ってあげたら、あの人は死なずにすんだのに」問題が起きてから、人はそう悟るが、それで終わり、日々の暮らしは少しも変わらない。。。。。

(3) 上記の事例紹介、地域でお互い助け合う共助の必要性を強く感じた

(4) 支援ネットワークでの広がり、お互いに助け合う公的サービス

インフォーマルサービス・フォーマルサービス

NPO等市民活動団体 等

(5) 新しい公共の考え方を、全体構成のわかりやすく理解

共助：介護保険制度

- ・地域包括支援センター
- ・包括的・継続的ケアマネジメント
- ・地域密着型サービス

公助：地域包括ケア

介護予防

健康増進

官民協働まちづくり

行政（官サービス）～民間（NPO 法人等市民活動団体等）

自助：近隣同士の助け合い活動

コミュニティ活動

ボランティア活動
家族間での助け合い 等

【成果】

- (1) 地域について、関心のあること、大切だと考えること
 - ・自分の地域を知らないので、もっと関心を持ちたい
 - ・挨拶や声かけが大切だと知った
 - ・近所づきあいが必要だと感じた
 - ・地域の行事に参加する
 - ・子どもの見守り、支えていく
 - ・地域が互いに協力し合える関係構築をする
 - ・こどもや世話焼きの人が減ってきており地域が寂しくなった
 - ・24時間365日市民を支える公的支援の必要性を感じる
 - ・児童虐待ケースでの地域における支援の取組みが必要だと感じる
 - ・自分自身が地域で出来ることから始めたい
 - ・祖父母孫まで家族関係から生まれる支え合いの大切さも認識した
 - ・中高齢者の社会参加で生きがい就労が生まれる
- (2) 地域の支え合い事例について
 - ・事例集を聴いて、非常に良かった
 - ・障がい者施設等の地域活動に積極的に参加している
 - ・有志仲間のグループで安全夜回りを継続している
 - ・ファミリーサポートセンター的な活動が地域で必要である
 - ・新たな地域のふれあい支え合い活動として考えていきたい
- (3) 支えあい井戸端会議やみんなの居場所の感想
 - ・様々な職種や立場の人の話が聴けてよかった
 - ・充実した良いフォーラムでした
 - ・福祉の専門家の話について、理解しにくかった
 - ・地域密着の視点は、どの地域においても共通していることを認識した
 - ・皆が積極的に発言していた、このような機会を増やしてほしい
 - ・もっと方向性を絞れたら生きがい就労への機会創出ができる
- (4) その他
 - ・昔は、地域の方は、色々と助け合っていたが何故、薄くなったかを分析できれば比較できる。
 - ・次回も参加したい

井戸端会議や居場所フォーラムも、何れも色々と意見が出て、良い質問やプラス議論等で、予定の時間をかなりオーバーした。

職種も立場も年齢も異なる人が参加したことで幅広い地域の課題の抽出ができたものと感じる。

今回の事業目的の高齢者の生きがい就労としての機会創出につなげるための調査研究の試行事業として、色々な課題が明確になったと考える。

地域のさまざまな人が悩む、生活の問題を、日々の暮らしの中で少しでも支え合えることができればと思う。

そのひとつとして、居場所等に地域の人が、気軽に集まれる場所が必要で生きがい就労は、そんなところから生まれてくるとヒントをいただいた。

具体的な生きがい就労について、新たな事業で考え提案していきたい。

5. 今後の課題と展望

① 「生きがい就労」の発信：

地域活動をしていると、高齢者の男性の姿が少ない。

もう少し活動してくれればと思うのは私だけでしょうか？

しかし、高齢者の男女とも地域活動への関心は高く、事実、参加した人は積極的に社会貢献やボランティアに参加していきたいと話している。

新しい地域の支え合いの担い手は、これら的高齢者の人たちである。

どのように関わりを持っていくか？つないでいくか？が大きな課題であると考えます。生きがい就労の意義を発信していきたい。

② 「寺子屋」で伝承：

元気な高齢者が余生をどのように過ごそうかと考えている。

機会があれば、皆さんに、若い人たちに伝承する役目があり余った人生ではない！

伝承できる寺子屋のふれあいの場づくり、居場所づくりが必要と考えられる。

休校した学校の活用など社会資源は、豊富にある。

③ 「ひきこもりの人・障がい者の人」を支える：

ひきこもりや不登校の若者達が多くなっている。

ひきこもりは200万人近くとのことであるが実態は定かになっていない。

この人たちは、普通に健康な身体を持ち問題ないと言われている。

そんな若者達が気軽に働ける場所として、相談できる場所として、自然豊かな田舎が、心の回復に役立つものと考えられる。

軽く背中を押してあげることができれば元気を取り戻すことができる。

また、障がい者に発達障がい者も組み込まれ、この人たちも同じ社会環境にある。

居場所が有効的であると感じる。

笑い声がたえない場所が必要である。

個人の社会的責任（自分 CSR）として、地域づくりの担い手として、顔晴って（頑張っ
て）行きたいものだ。

“ホッと村” 設置による生きがい就労創出事業

岡山県健康生きがいづくりアドバイザー協議会

1. 事業の目的

高齢化と社会構造の激変は、人間関係の喪失とか無縁社会と表現されるように、社会参加しない孤立と孤独化現象が進み、所在不明高齢者問題等は、深刻な今日的な社会問題となっている。加えて、人口減少社会に向い、社会を支える生産年齢人口の減少ともなり、社会保障制度における雇用、介護、年金等暮らしに直結する諸問題に不安を与えている。このように変化する社会にあって、将来へ向かって、安全・安心の地域社会づくりを考えなければならない。

長寿社会となった今日、高齢者が知恵と経験を生かし、三世代交流の中で、一定の役割を果たす必要がある。それは、健康長寿につながることでもある。

高齢者が元気であること、暮らしに生きがいを持つことは人としての宝物である。

そして、いつまでも社会参加の機会を得ると共に、自助、共助、公助の関係を、しっかりと受け止めた地域密着型の支え合う仕組みを早急に定着させる必要がある。

以上の認識のもとに、今回は「食と健康と生きがい」を中心テーマに、身近な地域での居場所として笑顔があふれる暖かな「ホッと村」開設を探ることを目的とする。

健康と生きがいを追求する健康生きがいづくりアドバイザーと生きがい就労を演出する高齢者協同組合そして行政とのコラボレーションによる新しい地域づくりを強く認識し制度を試行する。

2. 事業の実施体制及びその他の関係団体等との連携

- ・財団法人健康・生きがい開発財団
- ・岡山県健康生きがいづくりアドバイザー協議会
- ・岡山県高齢者福祉生活協同組合
- ・岡山市東区役所

東大高齢社会研究機構 辻教授による基調講演で、これからの高齢社会における地域づくりの在り方について受講のもと、健康と生きがいづくりを追求する健康・生きがいづくりアドバイザー協議会と、介護、福祉活動を通して支え合い、生きがい就労を創出する高齢者福祉生活協同組合が連携し、互いに活動の特徴を集約し、同時に、行政が目指す。

まちづくりの考え方をもって官民一体的取り組みを行うため、会議には、区役所から区長にも参加してもらい新しい公共への対応を模索した。

2. 実施した事業の概要

① 基調講演の開催

10月7日 豊かな高齢社会を
目指してと題して、

講師：東京大学高齢社会

総合研究機構教授辻氏

於：岡山国際交流センター



<基調講演と辻教授>

② 「ホッと朝市」開催のため運営委員会立ち上げ

10月26日 運営委員会立ち上げ（東区内）

12月15日 朝市スタート、以後毎月5の日を「ホッと朝市」として開催。

第1回会議を開催した会場

西大寺「百花園」



東区に誕生した「ホッと村」朝市
西大寺シャッター街のはずれに開店
賑わいの起爆剤になるか、期待される

*毎月5の日を朝市デーに

場所：東区西大寺観音院口

③ 「くらし互助の会」立ち上げ（高齢協及び健生内）

2月16日「くらし互助の会」立ち上げ、以後毎月例会。

同時に会員募集やコーディネーター採用呼びかけ。

ホッと村に「くらし互助の会」を併設して困った時はお互い様の支え合い活動の仕組みを地域に定着させ安全・安心の地域づくりを進める。

*本部：岡山県高齢者福祉生活協同組合本部及び

岡山県健康生きがいづくりアドバイザー協議会事務局内に置く。

あなたが扱った一石 水面の輪は 限りなく広がっていくだろう

安全・安心の輪を広げる「ホッと村」プロジェクト

●くらし互助の会（画面参照）
●コミュニティビジネス

生きがい・就労の輪
自分史づくりの輪
趣味の輪
健康づくりの輪

●特定ホッと都市（愛護寮園）
●生きがいサクル
●だいにんご花
●ホッとカフェ
●委員会
●自分史研究会
●自分史講座

●健康講座
●パソコンクラブ
●デイサービス
●水物用品交流会

●ヘルパーステーション
●介護相談
●生活支援
●市民役員人
●健康・生きがい

困った時はお互い様で

「ホッと村」プロジェクトは
①住み続けたいまちで、農園や子育て、介護、福祉等を通して生る地域の力で、「健康な生活づくり」を目指します。
②くらしの中で、知恵や技能をもち寄り、困った時は、お互い様で支え合い「安全・安心の暮らし」を築きます。
③人生の完成度を、自分づくり等を通して気づく、発想をもとに、生きがい・就労と社会貢献を生み育て「新しい高齢者像」を創造します。

<ステージⅠ>
「くらし互助の会」
画面参照

<共同プロジェクト>
岡山県高齢者福祉生活協同組合
岡山県健康生きがいづくりアドバイザー協議会

ホッと村 くらし互助の会

困った時はお互い様で支え合う会員制「くらしホッとライン」です

①必ず、会員登録して下さい

<手続き> 下記申込書に、氏名、住所、連絡先及び
口自分ができること、口してもらいたいこと、等
記入し最寄りのセンターへFAX又は電話ください。
<加入条件>
高齢者組合員又は健生おみやま会員なら誰でも加入できます。
<年会費> 1,000円（利用会員・活動会員の別を問わない）
* 会員の加入辞退は自由です。

②利用するときは

利用したい会員、近頃の連絡先へ
電話、FAX、メール、携帯等で依頼

依頼 ①「くらし互助の会」
(コーディネーター)

相談 ②

準備面相談（助かり料）
30分以内
(フロンコン)
ゴミ出しなど30分
程度以内の作業
は500円。
1時間以上の作業
は、要費法
(800円/1h)
が標準
* 双方了解のもの
でを行います。
* 1日の車取り
(1,200円/1日)等

募集集中!

ホッと村の要
「コーディネーター」
を募集しています。
年齢は特に問いません
が、専業主婦で地域づく
り(社会貢献)に意
欲ある人を求めています。
履歴書をもって
ご相談ください。

地域連絡先

岡山北地域 電話 086-234-9228 FAX 086-234-9215	信用 〒700-0914 岡山市北区東田町1-7-1
岡山南地域 電話 086-902-1120 FAX 086-902-1130	〒702-8054 岡山市南区東瀬田1-4-10 5 二股部コーポ205
倉敷地域 電話 086-450-5580 FAX 086-450-3050	〒712-8046 倉敷市津野町古新田602-16
高松北本郡事務局 電話 086-238-9228 FAX 086-234-9231	〒700-0914 岡山市北区東田町1-7-10
健生おみやま事務局 電話 086-522-4078 FAX 086-524-4078	〒713-8125 倉敷市互島秀崎2-70
岡山東地域 電話 086-943-1166	岡山市東区西大寺

会員登録申込

氏名	連絡先
住所	
△してほしいこと	
□受けてほしいこと	

<チラシ> 「ホッと村」(表)

「くらし互助の会」(裏)

こうして四者の現状認識のもとで、

- ① 地域の現状はどうか。
- ② 将来地域はどのような姿が望ましいか。
- ③ できることはどのようなことか。

等について協議し、自助、共助、公助の意義を認識しながらも、先ず、自分たちでできることから始めようと企画した。

4. 事業についての評価・成果

○基調講演

高齢化、生産年齢人口減少と今後とも社会構造の変化は予想以上に進む。基調講演では、一般参加者もあって、これからの高齢社会を考える絶好の機会となった。

○「ホッと村」構想

「ホッと村」構想は、これからの暮らしを支える地域のあり方、仲間づくりを問うに値するものである。

○生きがい就労と「ホッと村」

「ホッと村」は、大家族的で最も近くで仲間がふれあう場であり、笑顔があふれ、わいわいガヤガヤコーヒー一杯で語らう元気な高齢者の居場所であり、健康長寿村でもある。

「くらし互助の会」は、ホッと村の中にあって、仲間の知恵や体験をもち寄った人材バンクでもある。

困った時はお互い様という支え合い助け合いの中に「してもらう・してあげる」という冷たい関係でなく、「させてもらう・ありがとう」という、暖かい関係の中で、生きいきと「生きがい就労」を生み出す。そこには人材が生かされ磨かれていく、正に人材バンクの宝庫である。

○生きがい自家農園

ホッと村の中心に「自家農園」をおくことは、食と健康、更にはこれからの農業の行方も想定しながら、就労機会の場を探る。

これからの農業はプロの専業と生きがいを生み出す自家農園と二極化の方向がみえる。ここで考える、生きがい自家農園は有機無農薬栽培を行い、余剰産物をホッと村朝市に出荷し、皆さんに提供する。これも計画栽培ができれば種類も豊富になる。また自分でできないところは、出来る会員に分担してもらうこと等、ここにも支え合いの仕組みが生かされる。特に有機無農薬でつくる自家農園はこれからのくらしに潤いを与えることは確実である、

◎新しい発見

○買物難民の存在

かつて賑わいのあった商店街もシャッター通りとなって、日用品の買物は郊外型スーパーへ出向かなければならないが高齢のため、そこへ行くことができない買物難民が増えていることが分かった。

○介護保険の谷間

介護における生活支援はあるもののその適用外にあるものがあることも分かった。

今後の介護保険法の改正はこの谷間が更に広がる恐れがある。ここにも官民の支え合いの仕組みが及ぶことを考えなければならない。そこにも「生きがいの発見」がある。

○育てることへの生きがい

農業は人間教育の原点である、育てることから生命の尊さに触れ、成長や収穫に生きる喜びを感じる。そこにも新しい発見がある。

◎今後の発展波及効果

支え合いの仕組みは、同時に生きがいをもって自己実現できるか、そのように考えることで生きがい就労は限りなく開けていく。

ホッと村の充実がこれからの仲間づくりの原点になると確信する。

これからの健康生きがいがづくりアドバイザーのあるべき姿の中に、ホッと村コーディネーター機能をしっかりと持つことと、高齢者福祉生活協同組合が地域の支え合いの担い手として両者が仕組みを共有するならば、温かい支え合いの輪が広がるであろう。

社会構造の変化はあらゆる面に波及し、地域住民サービスは行政の主要な役割であって、町内会は地域活動の最先端の担い手であった。今もそのことに変わりがないが、町内会機能も形骸化しつつある。それに代わってNPO等の活動が盛んになってきているが必ずしもきめ細かい活動は期待できない。

これからの高齢社会は小単位の仲間づくりによる支え合いこそが地域の安全・安心につながると確信する。

5. 今後の課題と展望

○新しい公共づくり

今回の「ホッと村」構想と、くらし互助の会は、ほんの一部を試行実施したものであるが、今後は「ホッと村」にいろんな機能を付加することで「生きがい就労」の機会が増大すると共に、その効果が高まるのではないか。ホッと村は、それ以外でも夢が広がる地域づくりの核になり得るであろう。今後は新しい公共活動が求められている。

○人材バンクとコーディネーター

しかし、何といたっても組織の中心となる「コーディネーター」の存在が欠かせない。

今後は、会員登録管理を行うと共に「人材バンク」の形成を重厚化する。高齢者がこれまで蓄積している知識、能力、技能を生かした「コーディネート役」が先ず大変重要で「コーディネーター」確保しながら、基金訓練等も含め養成しなければならない。

○自家農園の広がり

また、自家農園にあっては、家庭菜園の持ち寄り、朝市に出荷することで手数料を得ることのみならず、育てるところから生きがいを発見する、有機無農薬栽培等にも今後工夫を重ねると同時に、これまでの、出来たものをもち寄るという今の方法に加え、目的別の栽培計画を立てることで新しい発想が生まれる。

例えば、大豆栽培を行い、収穫から豆腐加工まで、子どもたちと共に三世代交流の体験学習の機会をつくることもできる。

○くらし互助の会

利用会員は助かりましたと「助かり料」を支払い、活動会員は使ってもらってありがとう「生きがい料」を受け、活動に生きがいを生み、受けたものは感謝を返すという相乗効果が期待でき、新しい地域へ発展する可能性をもっている。

今後の課題は、この新しい仕組みをどのように普及啓発していくかであり、高齢社会を安全・安心の地域づくりをするか、人間回復とホッとな論議を重ねたい。

飯塚市高齢者等生涯教育支援者の指導力向上研修会

NPO法人幼老共生まちづくり支援協会

1. 事業の目的

飯塚市の「熟年者マナビ塾」および「高齢者等人材バンク」登録者を中心に地域で活動する、また活動を始めようとする高齢者の社会参画を推進し、生涯教育の支援者として、指導プログラムの立案・実践者としての力量を高めるため青少年指導、成人指導、高齢者指導を主要3領域とした生涯教育カリキュラムの編成・展開の方法を実習研修し、修了者を近隣市町村の学校や教育・福祉施設、団体等に講師として派遣する。委託を受けた本事業のねらいである「高齢者の生きがい就労の機会創出」ためのプログラムの開発およびその実現を目指すことを目的とする

2. 事業の実施体制及びその他の関係団体等との連携

NPO法人幼老共生まちづくり支援協会を主管団体とし、事業目的達成のため、飯塚市、飯塚市教育委員会、近畿大学九州短期大学に共催をお願いし支援を仰いだ。

事業実施にあたっては、当該NPO役員等で、福岡県立社会教育総合センターを会場として定例月1回の「生涯学習フォーラム in 福岡」を実施してきたので、その主要メンバーである役員が交替で講義・演習の指導を担当した。

参加者への呼び掛けおよび会場の準備等は、飯塚市教育委員会の協力を得て、中心部の穂波公民館を会場とし、飯塚市の現存の二つの組織メンバーを中心に市内および近隣市町村へ事業啓発を兼ね広く公募した。はがきでの案内およびチラシ配布での案内。

また、新聞紙上でも紹介してもらった。

3. 実施した事業の概要

1) 実施日

第1回	平成22年11月16日(火)	13:30~15:30
第2回	11月22日(月)	13:30~15:30
第3回	11月30日(火)	13:30~15:30
第4回	12月7日(火)	13:30~15:30
第5回、第6回	12月14日(火)	10:00~12:00 13:00~15:30

2) 事業場所 飯塚市穂波公民館 飯塚市秋松 TEL 0948-24-7458

3) 事業の対象(参加者数)

飯塚市内及び近隣市町村の原則60歳以上の高齢者

第1回	43名	第2回	38名	第3回	40名
第4回	31名	第5回	31名	第6回	31名

4) 事業の内容（実施プログラム・その内容）

実際の研修にあたっては、第1回目に配布できるように、6回分の「講座用テキストを作成し、受講者全員に配布した。

第1回 11月16日（火）

高齢者の社会参画と生涯教育指導の意義と意味

(1) 「熟年者マナビ塾」および「高齢者等人材バンク」事業の活力創造機能と社会貢献の意義 講師：森本精造（飯塚市前教育長）

(2) 高齢期における「活動」と「負荷」の意味

講師：三浦清一郎（月刊生涯学習通信「風の便り」編集長）

第2回 11月22日（月）

成人の学習心理と指導の留意点 講師：三浦清一郎（同上）

第3回 11月30日（火）

青少年指導の基本理念と学校外指導プログラムの立案と実施方法

講師：大島まな（九州女子短期大学准教授）

第4回 12月7日（火）

高齢者の活力向上支援プログラムの内容と方法 講師：三浦清一郎（同上）

第5回 12月14日（火）午前中

第6回 12月14日（火）午後

テーマ別指導計画立案実習（4～5班の班別グループ演習）

講師・指導者：森本精造、三浦清一郎、大島まな、古市勝也（九州共立大学教授）



4. 事後評価

1) 協力

高齢者を対象にした事業を担当している飯塚市、高齢者教育を担当する飯塚市教育委員会、大学で保育科を持つ近畿大学教習短期大学に出向き事業の共催をお願いしたところ快く引き受けて頂き、特に飯塚市教育委員会は高齢者等の人材を小学校や公民館事業等に派遣する事業を展開しており、積極的な協力を得た。

また、本事業は広く県内への情報発信することが重要と考え、福岡県の生涯学習情報センターであり、年間通して10万人を超える研修者が集まる県立社会教育総合センターの協力（後援）を仰ぎ、指導を受けながらも広く県内広報や資料作成等についての協力を得ることができた。

本事業は生涯教育支援者の指導力向上と銘打った事業だったが背景に高齢者の就労機会を創出するねらいがあっただけに、指導力を持つ高齢者の活動の場を提供できる関係機関の協力は不可欠であり、共催・後援は今後の事業展開のためにも有効だったと言える

2) 募集及び参加状況

募集については広く事業の啓発の意味も兼ね、飯塚市高齢者等人材バンクへの900名に及ぶ登録者及び現在活動中の「熟年者マナビ塾」関係者約230名に対し公募した。また近隣市町への啓発と参加呼びかけに募集要項やチラシを持参し広報をして回った。さらに地元新聞社等へも働きかけ掲載して貰うことができた。

その結果、参加者の多少の出入りはあったが毎回予定の30名は確保することができ、所期の目標値は達成できたと考えている。具体的な参加者数は上記3.3)のとおりである

3) 成果

(1) 「熟年者マナビ塾」は、市内の全公立小学校に併設された高齢者の自主学習と学校支援活動を目的としたシステムである。合併前の旧穂波町では平成16年から、合併後の飯塚市では平成19年度から市内全小学校で実施しているが、塾生に上記のような指導者を養成する主旨での研修はこれまで一度も実施したことはないで、自らの活動の意味を再認識し、青少年指導の理論と方法を学ぶことによって、学校支援においても、学校外の「子どもマナビ塾（放課後子ども教室）」の指導における彼らの意欲と指導力の向上が図られ、また新たな指導者発掘・養成事業としての役割も果たすことができた。

(2) 学校（子ども）と高齢者の結合がどれほど効果的であるかを証明できた。

(3) 「高齢者等人材バンク」（登録人数は現在約900名）は飯塚市の人材活用事業である。上記と同様登録者にこの種の研修の機会に恵まれることはなかったが、今回の研修を通して新しい生涯教育プログラムの必要性について理解を深め、併せて具体的実践の指導計画まで作成することができた。また、新たな人材確保にもつながった。

(4) 高齢者が蓄積した人生の知識や技術を地域に活用するシステム化を考える上で効果があった。他市町村からの参加もあり、参加者相互の交流も深まり、方法として修了者を市内及び近隣市町村に派遣する道筋を確保することができた。

(5) 高齢者の社会参画と活用が本人の活力を向上させることはもとより、彼らの活躍によって多大な地域貢献をもたらすことを実証する絶好の機会になった。

現状は高齢者の社会参画、社会貢献のモデル事業が決定的に不足しているが、飯塚市教育委員会では高齢者の出番づくりの一環として前述の「熟年者マナビ塾」「高齢者人材活用事業」が既存事業として存在し、新たに今年度から開設し今後の拡充が期待されている「いづか市民マナビネットワーク（e-マナビ）」事業への参加への了解も得られたので、今回の研修会修了者の今後の活動の場面設定に「e-マナビ」事業が活用でき、具体的に高齢者の生きがいづくりと就労につながる活動が展開できるようになったことは大きな成果である。

4) 事業の独創性・先駆性

高齢期は否応なしに心身の衰弱との戦いを余儀なくされる時代である。現に行政における高齢者の医療費、介護費の増加状況を見れば、間もなく自治体の財政的破綻を招きかねない勢いである。高齢者の三大恐怖は①寝たきり、②認知症、③孤立・孤独と言われている。この解消のためにも労働や活動から離れた高齢者に、活動や就労の機会と場を提供することは高齢社会の喫緊の課題と言わざるを得ない。

その意味で、本研修会は、事業のねらいに「高齢者の生きがい就労の機会創出」を掲げた試行事業である。まさに時宜を得た事業だと考えたが、現状は、世界的不況や、大学生・高校生の就職難が日々社会的ニュースに取り上げられ、フリーターやニートの増加が大きな社会問題になっている時代である。その中での「高齢者の生きがい就労の機会創出」は重要課題でありながら、現実対応が非常に難しい課題であると考えた。

そんな中で、本事業の独創性・先駆性を挙げれば大きくは次のとおりである。

第1は、現在学校や公民館等において高齢者のゲストティーチャー的な取り組みは多くなってきているが、事前に指導者としての心構えや指導上の留意点などのついで研修の機会は皆無に等しかったことに対し、今回の研修はまさに今後予想される高齢者の各分野での活動に対する予備研修事業であり、モデル的、先駆的事业と言える。

第2は、6回の研修講座プログラムは教育実践にコダワリ、講座内容の1/3の時間を演習の時間に充て、今自らが実践したい具体的活動プログラムの作成およびそのための具体的行動計画や行動に伴う上での配慮すべき事項等まで配慮した計画書の作成に時間をかけたことも今までにない研修会になったと考えている。

第3は 具体的に就労につながる事業として、飯塚市が本年度から始めている「e-マナビ」事業へ研修の成果をつなぐことができたことである。本研修会は6回で終了したが、受講生にはさらに「e-マナビ」事業への参加のための「指導者認定講習会」に参加を呼び掛け、その受講後それぞれに具体的に自己の持つ技術や能力を生かした講座を開設（飯塚市発行の「e-マナビ」事業公募一覧に名前と講座内容を掲載・市内配布）してもらった了解を得たことである。まさに就労機会の創出事業ととらえ支援していきたい。

5. 今後の課題と展望

1) 課題

(1) 生涯学習社会を迎え、市民の生涯学習は盛んになった一方で、生涯学習社会は選択社会でもあり、現実には学ぶ人と学ばない人との間に生涯学習格差をつくりだし、このことは少なからず子ども達の学習格差を助長していると言ってもいいだろう。

今回の研修会の案内も1000枚に近い案内状やチラシを配布したにもかかわらず参加者は30～50人である。もちろん忙しくて参加できなかった人が多いこともあろうが、情報がどこまで届いたか、どこまで届けることができたか、案内状を貰って参加、不参加などの決断はどのような判断に基づくのかなど今後の大きな研究課題と考えている。

(2) 高齢者の多くは自分に豊かな経験や多様な技術・技能を持ちながらも人の前で指導者になることに対し、奥ゆかしいのか、引っ込み思案なのかなかなか自分で前に出て活動をするという気持ちになってもらえない場合が多い。高齢者対象事業では行政や機関・団体、NPO等が積極的に背中押してやる必要がある。

今回の研修会でどこまで高齢者の背中押すことができたか、少なくとも受講生の就労機会創出にもつながる「e-マナビ」事業へは積極的に参加を進めたい。

(3) 高齢者の生きがい就労の機会創出のためには、財政的に厳しくなった自治体の経費削減施策に目をつける必要があると考えている。職員一人分の給料年450万円として、1回15000円の高齢者の出番を計算すれば、何と年3000人、単純に12か月で割れば毎月250人の高齢者の生きがいや就労が可能となる。超高齢社会の課題解決の重要な施策になるはずである。

「新しい公共」は「民でできることは民に」という施策の提起である。今後の社会動向から考えても今から高齢者の活用（就労）についての研究が不可欠と考える。

2) これからの展望

事業を主催してきた自分たちの組織、NPO法人幼老共生まちづくり支援協会は事業受託時点では県へ申請中であったが、研修期間中の11月25日にNPOとしての認証成立の運びになり、研修講座に弾みがついたことは言うまでもない。

もともとNPO法人幼老共生は、増加する高齢者と過保護に育ち、ひ弱になってきている子ども達との交流を深めることにより、高齢者には生きがいづくりの一環として学校外における子ども達の教育を担当してもらい、子ども達には高齢者の豊かな経験や技術を伝授してもらいながら、体力・耐性・学力・規範意識等学校外での教育を受ける機会づくりを教育行政と連携をとりながら支援していこうということで有志を募り始めたNPOである。その意味で本事業の受託および展開は、これから具体的に事業を始めるNPO法人幼老共生にとっても誠に時宜を得た事業だったと事業を進める中で再確認したところである。

それだけに、本事業を発想され、なお助成頂いた健康生きがい開発財団には感謝するとともに、今後さらに重要な施策になるであろう先見の明にNPO幼老共生として敬意を払いたい。

(1) 福岡県では子ども達の課題を、①学習意欲の低下 ②自尊感情の低下 ③学力の低下 ④体力の低下の4項目を挙げ県民運動として教育力向上を目指している。

何といたっても次代を担う子どもたちへの教育は全てにおいて優先されるべき課題だと思う。そのためにも増加する高齢者を「地域の宝」として地域で活用する施策が重要である。高齢者の生きがい就労の機会創出は今後の国レベルでの重要施策として企画・展開されるべきである。

(2) 高齢者の生きがい就労の機会創出は社会のあらゆる場面において可能だと考えられるが、それを教育の場面に領域を狭めて考えたとき高齢者の生きがい対策としての出番はいろいろ考えられるが、教育と就労との関係においては今までタブーだったような気がする。

でもこれからは、子ども達のたくましい成長にとって学校教育と学校外教育の連携が不可欠な時代になったと考えれば、教育は高齢者の生きがい就労の機会創出の1番手に挙げられるといたっても過言でない

(3) 本事業を受託したNPO法人幼老共生まちづくり支援協会としても、今回の研修事業を通して得たノウハウを持って行政や大学、他機関、団体等と連携しながら初期の目的達成に努力していきたい。